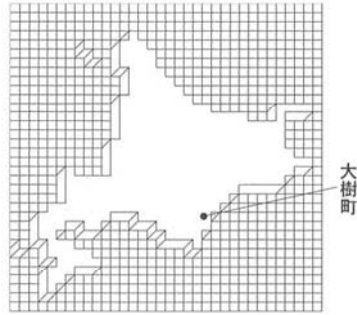


# 連載



## ◇大樹町の概要

大樹町は、十勝支庁の南部に位置し、帯広から南に六〇kmのところであり、東に太平洋を望み、西に日高山脈が連なり、町の東西を清流歴丹川が横切り、細長い地形である。東部は平坦地で農業地帯を形成し、西部は傾斜地で山岳地帯となっている。

町の総面積は八一六・三八平方kmと広大で、周囲は豊頃町、忠類村、中札内村、更別村、広尾町、

あのマチ  
このムラ  
・地域おこし活躍中

## 大樹町の事例

―十勝南部の大規模酪農―

農業の拠点の町―

No.22

日高管内の浦河町に接しており、道内九位、全国一二位の広さを有し、七五％は山林・原野で占められ、振興山村地域（七二年）、中山間地域（九〇年）にそれぞれ指定されている。（図一）

明治十六年、大樹農業の先駆者である、晩成社のリーダー・依田勉三らが十勝原野に入植以来、人間の限界を超える辛酸をなめ、非情な自然との戦いが続き、晩成社の事業は必ずしも実らなかったが、しかし、勉三らが精根を傾けた各

種事業は、今日の十勝酪農の源流になっている。

気象条件は、沿岸部に位置することから寒暖差が少なく、内陸と比較すると穏やかである。しかし沖合では、晩秋から初夏にかけて海霧が発生するため、気温がかなり低下する。降水量も内陸に比べ多いなど、気象条件としては必ずしも良いとは言えない。

## ◇大樹町農業の現状

大樹町農業の現状については、



図一 大樹町の概略図

平成六年度、農林水産省の企画により、(財)農政調査委員会が全国三カ所で実施した「大規模畑作・畜産農業地域における農業・生活環境等の効率的整備手法に関する調査」事業の対象地域として大樹町が選ばれ、当研究所が分担調査し、詳細なまとめが農林水産省の報告書として出されている。

当時の状況は、専業農家率が八一・三％であり、「大規模な酪農・

畜産農業」が展開されている。一戸当たり乳牛飼養頭数は八二・七頭であり、十勝管内では屈指の酪農経営規模で、飼養農家率は七〇%である。また、肉牛は一戸当たり五八・九頭と規模は小さく、飼養農家率は二〇%である。他方、「大規模畑作」という点では、普通畑面積が一戸当たり九・八畝で十勝管内平均の一七・四畝、網走管内平均の二二・一畝には及ばないものの、全道平均の四・八畝と比較すると二倍以上も大きい規模になっている。(写真①)



写真① 乳牛の放牧風景

### ◇環境共生時代における農業・農村環境整備の課題と対応方向

調査時点における視点や課題と提言の要約は次の四点である。

①大規模酪農・畜産地域のふん尿・環境問題は、これまでそれほど問題になっていないと思われたが、調査結果では、河川や海水の汚染が顕在化し、住民からの苦情や、ふん尿の処理(活用)に苦心を強いられることから、今後は酪農・畜産が地域内の他の農家・住民、他の産業などと共生していくため、問題の検討とともに解決の方向を明らかにする。

②①の問題と関連して、ふん尿を回介者、老廃物として廃棄・処分することを無駄な投資と考えるのではなく、その有効利用を考え異種経営(耕種部門)が互いに共生できる、交換システムの確立を検討する。

③大規模酪農・畜産、畑作経営

における個別の展開が、労働力、機械設備、資金、投資などで制約されるなかで、農業・畜産の支援システムとしてのコントラクター・請負システムの確立・形成が求められる。特に、酪農経営において「ゆとり」などの実現に向けた支援システムの形成、導入の可能性を検討する。

④環境問題の解決やゆとりのある経営の実現に深く関係し、なおかつ大規模酪農・畜産と地域住民との共生にも関連する、都市と農村の交流の一環としてファーム・インについて検討する。

### ◇農業の基本計画など

大樹町には、「第三期大樹町総合計画」(平成六年八月策定)Ⅱコスモス・プラン21)があり、その中で農業の現状と課題、施策・事業によって振興策が盛り込まれている。

一方、JA大樹町は三年毎に地域農業振興計画、農協中期経営計

画を策定(現在は第五次計画Ⅱ平成十一年～十三年)している。

何れも前記した課題や方向に対し、前向きな施策・事業の展開が示され、それに沿った取り組みの実践が行われている。

また、平成十一年四月にはJA大樹町の「五十年史」が発刊されているが、町の生い立ちや農民運動の記録、産業組合・農業会、農協事業の歴史が余すところなく記述され、将来を見据える貴重な資料でもある。(写真②、表1)

### ◇「大樹町ゆとり農業推進会議」の設置

平成六年以降に大きく変化した姿の一つとして、平成十年四月、これまでの関係機関による農業組織、①大樹町営農対策協議会、②大樹町農業関係機関代表者会議、③大樹町農業技術連絡協議会、④大樹町土づくり事業推進協議会、⑤大樹町農業技術試験展示圃運営委員会の五つの組織を統合し、二



写真③ 大樹町地場産品研究センター



写真② 第3期大樹町総合計画  
JAの地域農業振興計画（JAの中期経営計画）、  
コスモス・プラン21、JAの50年史

表-1 JA大樹町の基本目標

区 分	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年
農業生産額(百万)	8,750	8,277	8,912	8,802	9,319	9,538	9,779
うち 畜産物(〃) 農産物(〃)				6,880 1,923	7,308 2,011	7,476 2,062	7,683 2,096
戸当 生産額(万)	3,102	3,010	3,325	3,413	3,683	3,815	3,959
戸当 農業所得(万)	764	631	663	679	773	801	831
農家戸数 (戸)	282	275	268	256	253	250	247

資料：JA大樹町「第5次地域農業振興計画・農協中期経営経営計画（平成11～13年）」による。

表-2 大樹町における最近の農地の状況

単位=ha、%

地域 区 分	年別	大 樹 町			十 勝 管 内		
		1990年 (平成2年)	1995年 (平成7年)	対 比 95/95	1990年 (平成2年)	1995年 (平成7年)	対 比 95/95
A 経営耕地面積 (ha)		11,406	11,000	96.4%	216,956	215,760	99.4%
販売農家数 (戸)		359	311	86.6	9,880	8,604	87.1
1戸当たり耕地面積(ha)		31.68	34.92	110.2	21.96	24.85	113.2
B①耕作放棄地 (ha)		20	3		746	389	
②不作付け地(田)		-	-		5	3	
③不作付け地(畑)		48	95		1,065	1,688	
C=Bの合計 (ha)		68	98	144.1	1,811	2,077	114.7
C/A=遊休農地率(%)		0.6	0.9		0.8	1.0	

資料：1990年、1995年農業センサスによる。

注：①不作付け地については、調査日前1年間作付けしなかった田、畑である。

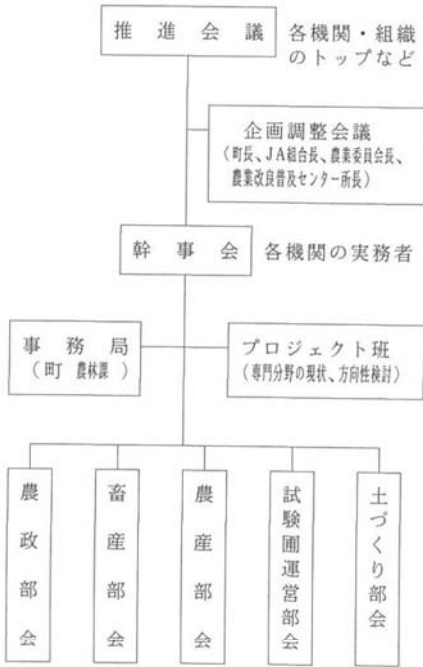
②遊休農地は、耕作放棄地に不作付け地(田、畑)を加えた面積とした。

③北海道の遊休農地率は、1990年=1.4%、1990年=1.8%となっている。

十一世紀の魅力ある大樹町農業を構築するため、関係機関団体の連絡協調、環境にやさしく収益性が高く足腰の強い、ゆとりある農業経営と農村活性化の実現をめざす組織にしている。(図②)

### ◆最近の取り組みの特色

平成六年の調査に基づく「環境共生時代における農業・農村環境整備の課題と対応方向」の提言に対し、その後の取り組みについて



図一 大樹町ゆとり農業推進会議・組織

特徴的な点に触れてみる。

#### ① ぶん尿処理問題

自己完結型を柱とし、堆肥舎、スラリー処理、固液分離など畜産基地再編整備事業、畜産環境保全施設整備事業により、平成十一年までに六五戸(酪農家は約一五〇戸)が整備を行っているが、液状スラリーの貯留施設は、フリーストール化などによる規模拡大が行われたり、冬期間の貯留量を賄うだけの規模には至っていない。

環境問題の法的規制が強化されるなかで、今後も引き続きぶん尿の適切な処理を進める考えで農家指導の徹底と、営農支援を強めていく方針としている。

#### ② ぶん尿の資源利用システム

これは酪農家の側に問題があるとして、平成十年度から堆肥の切り返し、運搬、散布を主体に農業委託事業についてJAが事業主体になり、協力会社との業務提携により取り組んでいる。

しくは後述)との関連で年間五日(二人で十人工)の「定休型」を基本にした運営で、約八〇%は消化している。その他「緊急型」や基本以外の「ゆとり」に対する「希望型」に対しても、適切に対応するなど酪農経営にとって欠かせない事業になっている。

#### ④ 環境問題などの対応

有効活用による地力の増進で優良草地、飼料畑の確保を図るとともに、畑作農家への還元には積極的な土づくり推進のため運搬費の助成をしている。

#### ③ 他の支援システムの稼働

ぶん尿の利用システム以外には稼働していないが、牧草の自走式ハーベスタについてはJAが所有し、十二集団で効率的に利用している。

徐々に理解が深められ、平成十一年度は対象数量に対し、三〇%程度の処理が行われているが、一層の意識高揚と実践の徹底に努められている。

#### ⑤ 都市と農村の交流

地域住民との共生  
活発な動きが見られないが、「大樹町地場産品研究センター」(詳しく

酪農経営における「ゆとり」の問題については、ヘルパー事業(詳



写真④ (有)半田ファーム

1階が住宅とチーズ工房、2階には軽食レストランがある

くは後述)による「手づくりチーズ」の指導をうけ、チーズづくりに取り組む酪農家が誕生する他に、木屑を利用したジャムづくりや牛肉を利用した各種商品(ハンバーグ、コロッケ、カレーライスなど)づくりの取り組みが見られる。

町ではこうした取り組みの農業者に対して簡単な器具の購入助成を行っているが、まだ萌芽的である。現在はこれらの人達のネットワークができていないが、将来的には

町内及び近隣地域でのファーム・イン等の組織と連携を保つなど都市と農村との交流にも結びつ可能性がある。(写真③)

また、地域住民との共生では、地場産品研究センターを農家と市街住民とが共通に利用したり、手づくりハムや軽食を出す酪農家の経営するレストランに町の人が訪れ、乳牛や小動物に触れるなどの機会が増えている。(写真④)

#### ⑥農地の流動化など

今のところ離農跡地の引き受け手があるので、余ほどの不良地でない限り遊休農地(耕作放棄地、不作付け地)の発生は少ないが、しかし今後は大きな課題として顕在化する懸念があるので、対応策を検討する必要があると関係者はみている(表2)。

平成六年以降毎年一〜二件の法人経営農家が設立されている。農事組合法人あるいは有限会社により、一戸一人を含め多様な形態であるが、地域連携型法人は誕生

していない。今後は農地の流動化や農作業の受託組織、新規就農者の研修を受け入れるなど多様な機能を持つ地域連携型法人の育成が必要と考えられ、支援システムの検討の中で位置づけが期待される。(表3)

#### ⑦畑作農家への対応

少数派であるが、畑作の将来を考慮した「だいこん」を奨励されたのは、昭和六十年からである。市況が不安定のため、最盛期からみると現在では作付けが減少している。その対策として、平成五年より九州の漬物屋と提携し、「浅漬け加工」を行い、現在は四〇万本製造・出荷しており、価格の安定化を図っている。

### ◇地域農業の拠点の町

大樹町は十勝南部の酪農や畑作の拠点としての機能が幾つかあるので紹介したい。

①牛乳の生産量の多い地帯のため、古くから雪印乳業(株)の酪

単位：設立件数

区 分	平成6年まで	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年
形態別	有限会社 農事組合法人	10 2	2 1	0 1	2 0	0 1
	合 計	12	3	1	2	1
	1戸1法人	4	0	0	1	0

資料：大樹町農政課調べによる。

表-3 大樹町における農業法人の設立状況

農工場が操業している。周辺から集められた生乳は、主として「チーズ」に加工され製品は全国に出荷されている。

②酪農ヘルパー組合は、平成四年、大樹町、忠類村、広尾町を範囲とする広域利用組合とし、十二名のヘルパーとJA大樹町から出向の事務局で運営している。各町村が独立で運営するのは困難であるが、広域ではヘルパーの派遣が効率的にできるメリットがある。

大樹町は過去の分村や旧大津村の一部を合併した町であり、忠類村に属する農家がJA大樹町の組合員であることから、広域地域の拠点の町として違和感がないことなどが窺われる。

③大樹町地場産品研究センターは、平成二年十二月開所され、この十年間にさまざまな加工の試作研究が行われている。農家の女性のみならず、一般の人達が料理の研究などの拠点として活用している。中でも「手づくりチーズ」の

技術は高い評価を受けており、町内の酪農家はもとより、広尾町や十勝管内の他、管外にもスターター（乳酸菌）やレンネット（凝乳酵素）の供給、製造技術を指導するなど柔軟に対応している。

なお、「カウベルアイスクリーム」もここで誕生し、JA大樹町が製造販売していたが、Aコープ店の閉鎖とともに、JAでは協同会社に権利を譲渡し、その会社が経営する店舗で引き続き製造・販売している。（写真③）

④十勝南部地域では、畑作のウエイトは少ないものの、豆類や野菜が生産されている。「だいこん」や「馬鈴しょ」の集出荷施設、「豆類」の調整施設については、周辺JAの組合員の利用の便を図っている。

### ◆三つのプロジェクトの 一つ「夢プロジェクト」

平成六年に策定した「第三期大樹町総合計画（コスモスプラン）」

21)には、新しい視点で進める町民参加型まちづくりのため、①「活」プロジェクト②「愛」プロジェクト③「夢」プロジェクトの三つが示されている。「夢」プロジェクトの中では、「航空宇宙産業基地構想」や「宇宙村」整備事業など宇宙へのこだわりが盛り込まれる他に「小さな芽支援事業」の創設や「まちおこし大樹賞」表彰事業など町民の夢を育てその実現を促すための事業が構想されている。

「チーズ」の町として、土づくり、良質な飼料生産、牛の飼養管理、牛体管理、乳質管理、チーズの製造、そして高い品質評価がつねにリンクする中で、持続的な酪農経営や食文化の情報発信基地として展開することなどで、「地域おこし」の夢が実現する素地ができていく（図3）また、農業のみならず、砂金が眠り口マンが秘められている清流歴舟川や、豊富な森林など地域の資源の活用（すでに、し

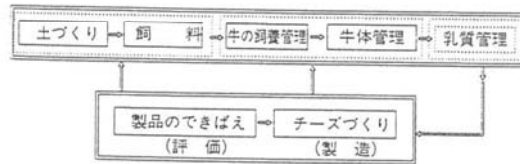


図-3 手作りチーズから原料生産へのフィードバック  
資料：「畜産コンサルタント」98年2月号掲載記事より引用  
大樹町地場産品研究センター・主任山岸真氏による

らかばの樹液がジンギスカンのタレとして利用している）するなど取り組みにも期待される。

十勝から浦河へ通する天馬街道の開通、内陸部から広尾町に通じる高規格道路の計画、広尾町にある十勝港の整備などによって交通の便もよくなり、観光産業の振興にも期待される町でもある。

レポート

研究顧問 富田 義昭